

△ 卷頭言 ▽

国際シンポジウム「地域研究と社会諸科学」

——『歴史と未来』第十四号発刊にあたって——

中 嶋 嶺 雄

去る十一月九日から十二日まで、「地域研究と社会諸科学」と題する国際シンポジウムが本学で開催された。国際社会の諸関係がきわめて多面的に展開されつつある状況下で、それぞれの集団や民族が国家として、あるいは国家の枠を超えてかかえている問題群を内在的にとらえるために、地域研究 (Area Studies) の重要性が様様なかたちで唱えられている昨今であるだけに、今回の国際シンポジウムは、実に数多くの教訓を私たちに与えてくれた。このような国際シンポジウムは、本学にとっても初めての試みであったが、学際的な総合科学としての地域研究の発展が従来の学問研究、とくに既成の社会諸科学にたいする挑戦となっているのではないかとの問いかけを前提としたこのような国際シンポジウムは、わが国でも初めてのものではなかったといえよう。

幸いにして今回のシンポジウムは、本学の長幸男学長以下、関連教官や本学事務関係諸氏の御協力、文部省国際学術局をはじめとする資金援助、それに裏方を担ってくれた私の研究室の諸氏や多くの学生諸君の献身的な努力のおかげで、延べ五〇〇名前後の出席者を得て盛会であった。

外国人ゲストとしては、『文化を超えて』『沈黙のことば』などで知られる世界的な文化人類学者エドワード・ホール夫妻、『通産省と日本の奇跡』などの著で注目されているチャルマーズ・ジョンソン教授 (米カリフォルニア大) と『アメリカ人の日本観』の著者シーラ・ジョンソン夫人、オーストラリアのアジア研究学界を代表するインドネシア研究の大家ジョン・レック教授 (モナッシュ大学)、オックスフォード大学日本研究所長の気鋭政治学者 J・A・A ストックウイン教授、『儒教文化圏の秩序と経済』の名著で注目された金日坤・韓国釜山大学教授、インドの地域研究の中心ジャワハルラール・ネルー大学東アジア研究センター所長の K・V・ケサヴァン

教授、それに中嶋ゼミの会の諸君とはおなじみのフランス国立政治学財団のクロード・カダール夫妻の十名が参加された。国内ゲストとしては、報告者の一人に文化人類学者の中村光男・千葉大教授が加わり、中根千枝、山崎正和、石井米雄、米山俊貞、飯田経夫、渡辺利夫、猪口孝、黒田寿郎の諸先生がデイスカッサントやパネリストとして、また宇野重昭、有賀貞、板垣雄三、小田英郎、片倉もとこ、梅津和郎、加賀谷寛の各教授がゲストとして参加され、本学地域研究科の諸先生多数が報告や討議に加わった。

討論の流れは、当然のことながら、地域研究とは何かを模索する議論を底流にしながらも、大別して二つの方向にあったといえよう。その一つは、地域研究の教育・研究のあり方やディシプリンと地域研究の関係、国際関係論と地域研究の関係さらには地域研究にとっての外国語学習のあり方などの方法的な議論であり、他の一つは、対象地域を分析する基本視座を個々の文化的特性に求めるべきか、より普遍的な社会の制度 (Institution) に求めるべきかといった議論であった。

こうした諸点をめぐって議論はときにはまっこうから対立し、ときには共鳴しながら展開されたが、いずれも知的な刺激に富むものであった。内外の第一線の研究者の白熱した討論を傍聴した参加者、とくに院生、学生諸君には、多くの指針を与えたことであろう。

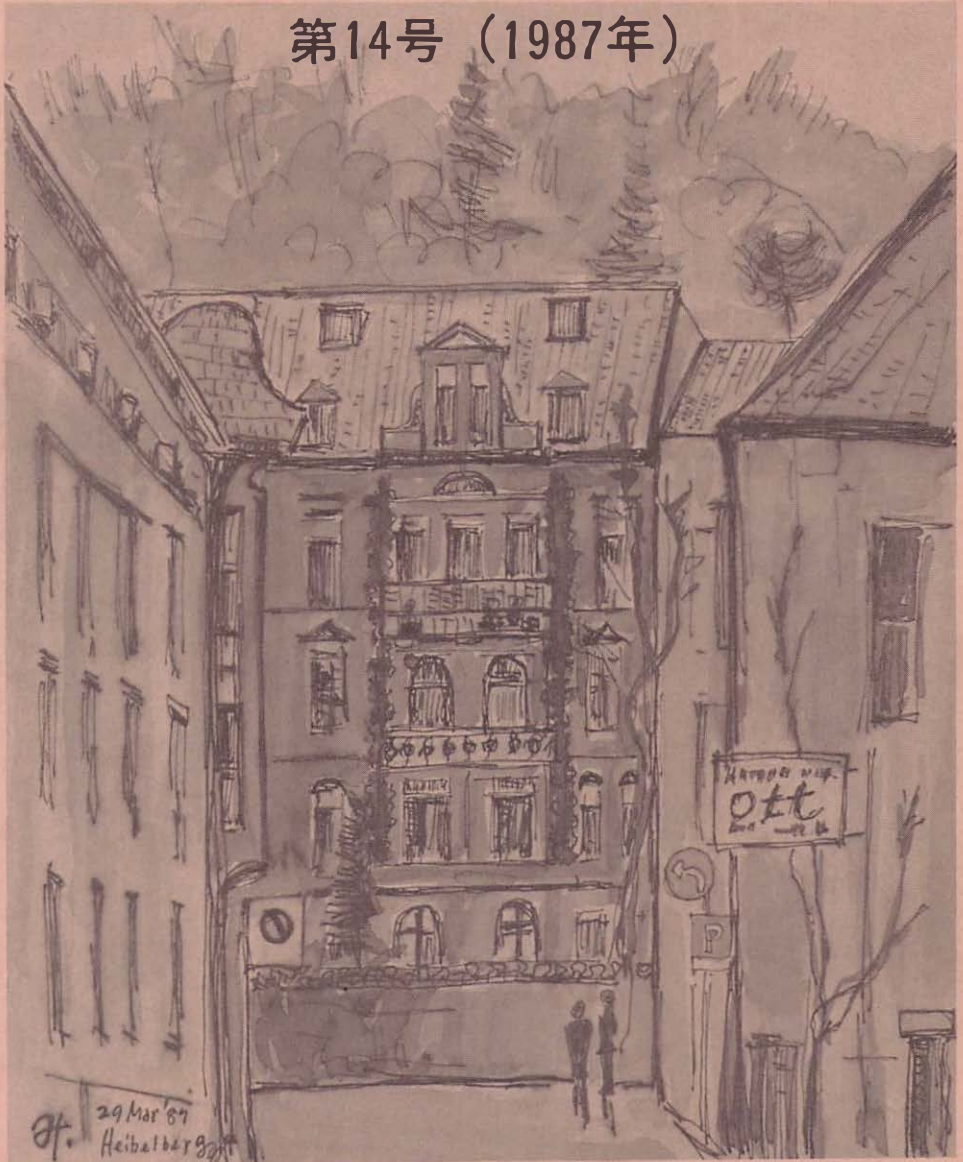
ところで、かつて一九七六年六月に本学で開かれた「国際環境」シンポジウムでは、政治学的アプローチ、歴史学的アプローチ、地域研究的アプローチの三者の統合の重要性が今後の学問的課題として確認されたことがある。以来十一年余の歳月のうちに、地域研究の重要性はさらに大きくなり、今回の国際シンポジウムでは、言語を基礎とし、社会諸科学 (ディシプリン) を学際的もしくは個別重点的に導入する総合科学としての地域研究の位置づけがかなり明確になされたことは、きわめて大きな収穫であった。

私は、一九七六年九月刊行の『歴史と未来』第四号発刊にあたって、「先週の学部教授会で、地域研究の大学院構想が念願久しく可決された。……いまようやく学内で一応の成案を見たにすぎないが、しかし、本学の歴史にとっては画期的な、新しい第一歩であったと思う」(巻頭言「いま一度の発表」)と記したことがある。この大学院構想は翌七七年四月に実現し、本学に地域研究研究科が発足してすでに十年の歳月を経た。本学では現在、大学院博士課程設置の準備が進んでおり、今回の国際シンポジウムで得られた収穫が、制度的にも実りをもたらすことを念願している。

(一九八七年十一月二十二日)

# 歴史と未来

第14号 (1987年)



東京外国語大学 国際関係論

中嶋嶺雄ゼミナール